

50年を迎える浜松高校演劇教室の経緯からの考察（第一部）

Consideration from the Circumstances of the Hamamatsu High School Theater Classroom which Meet 50 Years (№1)

酒井 勇 治*

1. はじめに

浜松高校演劇教室は、次年度（平成25五年度）で50周年を迎える。浜松学院高校（旧興誠高校¹）は、その第2回から参加し、その運営に主体的な役割を担ってきた。私は、その後半の19年間、運営委員として関わり、生徒たちの受け止め方を見てきた。浜松高校演劇教室の50年の歴史を顧みながら、演劇鑑賞は何を歴史に刻んできたかを考察していきたいと思う。しかしながら、私が関係したのは30周年以降であるので、創立期から熟成期に関しては、10周年ごとの記念誌を参考にしながら記述することとする。

第一部 歴史、制度面の考察（今論文）

第二部 生徒の感想・アンケートを中心にしたの考察（次年度予定）

2. 浜松高校演劇教室の歴史

2-1. 創始の経緯

「演劇教室開催に当たって一経緯と願い」という文が10周年記念誌（資料集）に掲載されている。その要点をここにまとめる（記念誌からの抜き書きやまとめは平成明朝体3で載せる）。

「戦後、各校は毎年鑑賞会を開いている数校を含め、殆どの高校で開かれ、優れた舞台芸術の力は私たちの心を強く揺り動かしてきた。しかし、各校ばらばらに計画されたため、レパトリー、期日、会場、経費などの点で満足するものではなかった。明確な教育目的のもと、よりよいレパトリーを主体的に選び、良い会場、優れた舞台芸術を安く見せるために、市内高校が一体となって演劇教室を開くことはできないか。そこへ持ち込まれたのが、浜松演劇観賞協議会²からの『夕鶴』による演劇教室という好意的な話である。近代日本新劇史上不朽の古典的名作を、各校から代表が集まり、12校、9,000人の生徒が、1週間に渡る、画期的な演劇教室が開かれることになった。」

優れた舞台芸術を鑑賞することに意義を見だし、学校現場に組織的に取り入れた取り組みであったと言える。画期的という表現がまさに当てはまるのは、こういう組織が初めて作られたことを指す。舞台鑑賞について、会長を務められた宮下祐一氏³は資料集の巻

* 浜松学院大学（国語科教育法）

頭に「『名作』の持つ楽しさは文学の上では到底理解しえるものではありません。肉体を持った生の人間の演ずるドラマを観ることの楽しさは、・・・特に若い学生諸君が感動を素直に受け取って、それぞれの血肉に化することで、どれだけ大きく成長することか。」と述べられている。

何事も創始するためには大きな力の結集が求められる。教育委員会などが主導する組織は比較的現場に受け入れやすいものだ。静岡県でも、教育委員会が主導した「高文連」の芸術鑑賞は、学校全体で取り組んだり、クラスまとめて参加したり、係に決まった教員が率先して取り組むことで行われていることが多い。しかし、そこに継続性があるかと言えば、形の上では毎年行われているが、その中身は係の先生方の学校が主体的に取り組んでいる。年が変われば、係の先生方も替わり、同じ生徒が鑑賞する機会は多くない。大雑把で乱暴な言い方をしてしまえば、動員のような形で実現していると言えよう。しかも演目は伝統芸能であり、その鑑賞は大事な事ではあるが、お仕着せのように歌舞伎と能・狂言が選ばれることには疑問を持つ。現代演劇に眼を向けることは全くない。

それに対し、国語の教員、演劇部関係者、視聴覚関係者、図書関係者などが各校の代表者として集まり、演劇教室が開催されるに至る経緯は、演劇の持つ力を信じ、生徒の成長を期待しての行動であった。「演劇の総合性」と後に規定されているが、現代演劇の持つ限りない可能性に託したと思われる。

また、この教室が、第1回の開催だけで終わるのか、次へ続くのかが大きな分かれ目であった。しかし、生徒の受け止め方の盛り上がり、創始された先生方の熱い思いにより、関わった教員の中に確信と自信が生まれた。11校が参加し、歴史を刻み始めた一歩は、その後大きな広がりとなる。

2-2. 第2回への進展

第2回資料集に「演劇はあらゆる芸術の中で、最も具体的であり、現実的でもあり、総合的な芸術であります。しかも、舞台の上に展開するドラマは、決してある人生の模倣や繰り返しに過ぎぬものではありません。演劇だけの持つ魅力あるやり方で、人間や歴史や社会の問題について考えさせるのです。」「生徒諸君の生き生きとした要望に応えるとともに、演劇教室を実施する主体を明確にするために『浜松高校演劇教室企画運営委員会』を設け、将来にわたって演劇教室を充実、発展させるために永続的に組織する。」とあり、将来にわたってこの組織が継続されることが示された。演劇の持つ総合的な芸術性に着目した点はおおいに評価できる。そしてあらゆる根本的な問いかけのできるものとしてとらえている。多感な高校生に、人間そのものについて働きかける芸術だとし、永続的に存在するものだという評価を与え、二歩目を踏み出している。二歩目を踏み出したことが、今後みにつながる大きな力になっていることは疑いようがない。

2-3. 舞台作品の選定の特徴

国語教員が中心的な委員になったことがレパトリーにも影響している。初期の作品には、国語の教材にも扱われる「名作」が選ばれている。第1回が、教科書にも採録されている木下順二作「夕鶴」であり、第2回が島崎藤村原作「夜明け前」である。第3回は三好十郎作「炎の人」、第4回アンネ・フランク原作「アンネの日記」、第5回幸田露伴原作「五重塔」と続く。

脚本あるいは、その題材となった原作が、高い文学的価値を持ち、読者に訴える力を持つ文学作品であるが、さらに舞台化され、芸術作品としてもその輝きを持つものがレパトリーに選ばれていたと言える。舞台は必ずしも原作を忠実に描くわけではないが、舞台化された作品は、原作のテーマや物語性を受け、再構築され、視覚的、聴覚的なあらゆる要素を満たし、役者という生身の人間を通して表現される芸術になっている。

その後、第6回・ゴーリキー「どん底」、第7回・森鷗外原作「阿部一族」、第8回・シェークスピア「ハムレット」、第9回・宮沢賢治原作「銀河鉄道の恋人たち」と続く。その当時の日本を代表する劇団がこぞって「名作」を舞台化していたことも、このレパトリーに影響している。ぶどうの会、劇団民芸、文化座、前進座、劇団東演、俳優座と続くが、高校生が鑑賞する舞台に、その時代を代表する名優、例えば劇団民芸で言えば、滝沢修氏や奈良岡朋子氏らが出演している作品が並んでいる。つまり、名優が出演する舞台は、その当時としての評価が高い作品といえる。つまり、最高芸術に値する舞台をもって、「演劇教室」を行うことは、まさに創始の主旨と合致していたと言える。

2-4. 第5回までの振り返り

第5回資料集に、過去5年の歴史を振り返った記述がある。

- ① 高校教育の場で、良い演劇を見ることを通して、青年の火を盛んにする事には大きな意義がある。
- ② 演劇の好きな生徒や、見たい生徒だけを集めて行われるものであってはならず、全員鑑賞という方法こそ不可欠で、経済的理由を含みながら、教育の本質に関わる問題として不可欠である。
- ③ 全員鑑賞の方式も、学校の明確な教育目的に基づいて、より良い作品を主体的に選んで実施し、浜松の各高校がまとまって、組織的に運営できる。
- ④ 演劇教室は永続すること。永続することで所期の目的を目指すことができる。

この振り返りの中に、50年の歴史につながる演劇教室の礎が確認されている。そして、具体的な運営として、「資料集」「観劇会」「感想文集」という1年の流れが組織として形成され、それらを連環させて進んできたことが示されている。このことが、具体的な発展の要因だ。この地道な取り組みは、それまで全国的にもなかったものであるだけに、真摯な論議の末、そして運営委員の熱意が結集して作られたと言える。過去、単独校による

観劇が主流であった中で、浜松という一地方都市にある高校が結集し、同じ演目を観劇するという画期的な組織が誕生した。しかも公立高校と私立高校の区別なく集まったの組織となった。最高の参加校数30校を数える。

この浜松発祥の演劇教室は、その後、磐田、藤枝、島田、金谷へと広がっていく。全国的にも珍しい浜松発の演劇鑑賞形態である「浜松高校演劇教室」が生まれた。全国へも発信され、それぞれの地で、組織される経緯は違うのだが、高校生の合同鑑賞が山形県、長野県、石川県などへ広がっていく。

2-5. 生徒の主体的参加

「演劇教室」の成功の一つの理由として挙げられるのは、生徒自身が積極的に参加できる形態が作られたことだ。それは、観劇という、ある意味で受け身の行為から、生徒自身の思いを「感想文」に置き換える主体的な行為を取り入れたことだ。自らの観客としての思いを表現でき、それが感想文集としてまとめられ、生徒全員が共有できる形態を第1回から実現させたこと。また、「座談会」を設け、各校の生徒が学校という枠にとらわれず交流していることも画期的な取り組みである。同じ舞台を観劇しているからこそできることである。さらに「アンケート」を生徒から取り、運営に敏感に反映させ、対応していることがある。運営委員の先生方の工夫が感じられ、民主的な運営が初期の段階に実現されたことが、50年の歴史を築かせた要因になっている。観劇という行為だけに終わっていたら、単発的な鑑賞教室に終わっていたし、その記録は残らない。「演劇教室」という名前にある、「教室」の意味が薄くなる。

この「演劇教室」という名前の付け方は、運営委員や劇団の中でも、論議があったと聞いている。「教室」と名付けたことは、やはり授業の一環としての位置づけが運営委員にはあり、学校ではない会館（優れた舞台環境）に足を運び、優れた舞台を鑑賞することは、普段の授業ではできないことであり、平常の授業を取りやめてまでも実施をする価値を見いだしている。学校を劇場に置き換えることに意味があった。それに対し劇団は、「授業」のように、与えたり、学んだりするものではなく、その場に身を置いて、全身で何かを感じるもの、両者（舞台と観客）双方が共に作り上げるものという主張がある。シンポジウムなどでも論議になっている。少なくとも劇場という場に身を置いて、そして、教条的ではなく、普段の授業では到底なしえない、座学ではなしえない何かを生徒が舞台に感じ、自分に問い、他に問うという行為が行われている。劇場で舞台鑑賞することに生徒自身が意義を見いだしたことは、この演劇教室が50年という歴史を歩む要因と言える。

3. 演劇教室の理念制定

「演劇教室」が長く続いてきた大きな要因の一つに、「演劇教室理念」が明記されていることがある。その理念を毎年確認し、運営に生かしてきたのである。各校の運営委員は、

先生方の学校移動や校務交代があったりする。演劇教室は継続性が運営の「柱」になっているので、断続することは運営に支障を来すことになる。各校の職員会議などで、演劇教室のことが議題になる時に、「理念」が据えられておれば、その骨子を説明し、理解を得ることで、その意義が確認される。具体的な運営にも生かされることになる。しかし、マニュアル化することには、形だけの継承になる危険もはらむ。だから、魂である「理念」の継承が大事なのだ。

3-1. 理念

様々な論議の末、昭和59年に特別委員会で選定された理念について骨子をあげる。

演劇教室の理念—その継承と展開—と題されて示されているが、20周年を迎え、検討が加えられている。その理由は、演劇教室の活動の停滞化、形式化を憂える声が出てきたと記述されている。20周年のこの時点で、現状にたって「4つの理念」を展望している。

(1) すべての高校生に演劇を鑑賞させるのはなぜか

「鑑賞」という行為は、視覚と聴覚を通して心的感動を体験する行為である。演劇は①感動の直接性＝演劇は生身の人間が素材となって構築される芸術で、この直接性が、他の芸術よりも深く、強烈な感動を高校生に与える。②演劇の持つ総合性＝舞台空間、演技者、戯曲などのあらゆる芸術的要素と、文学性、思想性という内的要素を取り込んで統一した総合的な世界である。③問題としての今日性＝演劇が反復不可能な一回性の芸術であり、常に今日という時間に生きるものとして演劇を規定し続ける、この3点は演劇以外のものからは容易に得られないものであり、高校生にとって最も人間的な体験である。

この「理念」を確認したことは、これまでの活動を総括し、今後の展開に指針を与えたと考える。合同鑑賞を進展させるためには共通の考え方が必要であり、各校の運営委員が交代しても、その指針があることで、ぶれない運営につながる。

ここに述べられていることは、演劇の持つ特性が、ナイーブな高校生の心に直接切り込む総合性を持つことである事がまとめられている。

(2) どのような演劇を取り上げるか

演劇教室は一つの作品を見せることをことをもって終結するものではなく、少なくとも三年間の三本の作品を鑑賞させることで成果を問うものである。あるイデオロギーや、ある様式や、ある人生観を押しつけるものではない。現代演劇として、そこに一つの真実があり、迫真力をもって生徒に訴えてくるものでなければならない。

継続すれば、高校生活三年間に3本の舞台を鑑賞できる事実がある。つまり、この3年という間に本の舞台鑑賞ができるわけで、ここに生徒の成長がはかれる要素が存在する。

(3) 教育活動としての演劇教室＝所期の目的を達成するためには、演劇教室が高校の教育活動の中にしっかりと位置づけられていなければならない。そのために、事前・事後の指導の充実が不可欠の条件である。資料集を中心にした事前指導、感想文による感動の確認お

よび感想文集の発行を中心にした事後指導は、本教室を支える基本的な教育活動である。

ここにおいて、「演劇教室」が教育的要素を再度確認している。教育とは、生徒の心的成長を促すことが求められる。自らを省みるという行為は、教育の場にあつて基本概念であり、その積み重ねの中で、成長していくものである。この「演劇教室」が、単に1回の観劇のみに重点を置くのではなく、事後の振り返りを活動の一つとして明確に位置づけたことは、「演劇教室」の教育的要素を高めたと言える。

3-2. 資料集

資料集は事前教育として位置づけられている。第1回の演劇教室実施にあたり、資料集が作られ、全生徒に配布されている。

資料小委員会が、各運営委員の分担により編成され、当年度観賞演目の資料を作成している。事前教育の役割を果たすため、様々な工夫がされてきた。当該の作品、舞台について、あらかじめ知識や情報を知らしめるために、作成される。歴史的な背景、時代背景、知っておくとわかりやすくなる用語の解説、あるいは舞台の特徴、そして劇団や役者さんの紹介などとともに、例えば戦争などの「特集」を組んで掲載することもある。

舞台鑑賞において、ある程度の知識をもって観劇することで、やはり問題意識が高まるので、資料は欠くことのできないものになっている。問題意識を抱きながら観劇することが、この演劇教室の特徴でもある。

3-3. 会場（優先使用）

生徒が高校単位、あるいは何校かの合同で市のホール（主に浜松市民会館、後に浜松教育文化会館や浜北文化会館）で観劇する方式が確立された。

そのために、優先使用を取り付けた事が大きい成果だ。会館使用は、くじ引きが原則であった。しかし、同じ会場で2週間前後連続して使用する（舞台装置をこしらえたまま置いておく必要性）ことから、歯抜けのように途中使えない日があると、その都度舞台装置の取り壊し、また設置をしなければならないので、どうしても連続使用を認めてもらう必要があった。しかも、会館が秋の稼働率のきわめて高い時期であることから、難しい面もあったが、毎年継続的に使用することで、会館の理解が得られ可能になった。このことが、やはり続いてきた要因の一つであることは間違いがない。1年半前に次年度の会場が確保でき、その日程に沿って各校の希望が出され、調整の上決定する。なにぶん、各学校も、様々な行事がある中で、この演劇教室を優先的に組み入れる必要がある。それは、この演劇教室の持つ役割を理解しているからであり、会場へ足を運ぶことが、日常の学校生活では得られないものを、彼らに与えることにつながると思う。会場が確保されたことで、日程調整はあるが、秋の時期の行事として各校も位置づけている。

3-4. 観劇

9月後半から10月初旬の会期内の午前ないしは午後に会場に集合し観劇する。

午前は、9時半開始という事が多い。しかし、会館を使用できるのが8時ということで、劇団には相当無理なことをお願いしてきた。本来、舞台の調整や役者さんのメイク、体作りを考えると、10時開始が良いのだが、学校の時間割と照らし合わせると、この時間設定を動かすのが難しく、無理なお願いをしてきた。本来、舞台公演は、午後ないし夜の公演が基本で、朝の公演は生理的にもなじまない。歌舞伎ですら11時開演が普通である。故に、役者は朝5時くらいに起床し、ホテルで柔軟などをしたり、メイクの基礎を作り上げ、劇場に入る。劇場前で発声や柔軟をしている役者を見かけたこともあった。

午後は、1時半開演であるので問題はないのだが、午前の部が12時を過ぎるような舞台は、午前、午後の間がないので、舞台転換などが大変であった。

生徒は、劇場に直接集合か、学校から集団で集まるか、遠方の学校はバスを仕立てて集合した。劇場前に集合をかけ点呼する学校もあれば、座席で点呼する学校もあった。

観劇態度に関して言えば、初期の頃は騒がしい生徒が見られたり、場内が暗くなると、一時わいわいはやし立てる生徒もいたりしたが、近年は舞台が始まると集中して舞台を鑑賞できるようになった。これも、長年見続けてきた成果である。

3-5. 座談会

座談会は、この演劇教室が1校単独で行われていないことを実感できる時間でもある。観劇した高校生が各校から集まり、いくつかのテーブルに分散し、感想を劇団の人（役者、制作者、演出家、スタッフなど）を囲み意見交流をする。

私がそばで聞いていておもしろいと思うのは、舞台の内容に生徒が切り込んだ発言をする時だ。同感したり、違う感想に触れたりする座談会は、舞台の内容を深化させるものなので、聞いていておもしろい。舞台の感じ方、受け取り方は一様でない。むしろ、それぞれの生徒の人生に深く関わる発言がされたりすると、他の生徒も触発され、再度自分に問い直している様が見受けられる。劇団の方々も、生徒の正直な感想を求めている。もし、伝わっていないならば、なぜ伝わらなかったかを考え、深めようと努力する。

3-6. 感想文

(1) 感想文

それぞれの学校で取り組みの違いが見られるが、各校代表の感想文が集められ、感想文集にまとめられる。午前観劇をし、午後感想文を書いている学校がある。このやり方は、書く時間の確保がされ、観劇後すぐなので、生々しい感想が生まれる。

しかし、昨今は授業時間の確保が問題になり、感想文は家での宿題という学校も少なくない。私の学校もご多分に漏れずその形態にならざるを得なかった。家でじっくり書くと

いうことはできるが、書かない生徒もあり、事後の確認作業がおろそかになってしまうのが実情であった。4枚半から5枚という枚数をこなすことそのものが大変だと訴える生徒も見られる。主旨に沿いながら、質を確保し、内容も伴う感想文を揃えるのは、近年難しくなってきたと感じる。感想文を書く以前の問題でもあるが、舞台が良い（生徒に問いかけられるような舞台）と感想文の質も量もあがる。自然に筆が進むのだろう。また、資料集が資料として、舞台鑑賞に参考になる題材を掲載している場合には、感想文の質、量ともに良くなる。

（2）寸感

短い感想のことを言う。テーマに関するものだけでなく、舞台表現の何か、例えば役者さんのことや舞台照明、音響、衣装、舞台装置などの感想、意見をまとめたものだ。短評と言い換えても良い。

（3）座談会報告

座談会における参加者の感想や意見をまとめ、掲載する。

（4）教師感想・座談会の報告

貴重な資料になる教師の立場で書いた感想文。生徒との感想の違いは、受け止め方を知る上で重要だ。また、座談会での発言を掲載することで、その場になかった人達に生の感想を伝えることができる。

（5）アンケート

観劇した作品の評価を中心にした問いが並び、演目に合わせて、質問項目が感想文小委員会で作成される。次年度に向けた質問も項目にある。次年度どのようなお芝居を観たいかのアンケートは、運営委員として参考になる。

3-7. 企画（次年度候補作検討）

（1）企画小委員会

企画小委員会が次年度候補作を提示し、その7、8本の候補作から3本の候補作を委員会で選定し、企画委員会がリーフレットを作成し、それを生徒に配布し、1、2年生の生徒が投票をして決定する。これは、浜松演劇教室が考案した民主的な運営の一つと言える。

（2）三年間三本の観劇（基本理念）

「演劇教室は一つの作品を見せることをもって終結するものではない。同一の高校生に、少なくとも三つの作品を見せることによってその成果を問うものである。あるイデオロギーや、ある様式や、ある人生観を生徒に押しつけるものではない。一つ一つの作品が、その作品独自の世界や価値観を持っているのは当然である。しかし、演劇教室は、ある一つの世界や価値観の形成を促すものではない。ただ、どの作品を取り上げた場合も、それは現代演劇として第1級の舞台成果を持ったものであり、かつ、一つの真実が迫真力をもって生徒に訴えてくるものでなければならない。」（演劇教室40年より）

以上のような理念が示され、継続に意味を見だし、少なくとも高校在学中に三作品に出会うことの意味づけがなされた。これは、高校生が「良き観客」として育てられていくことにもつながる。「教育活動の一環」という理念にも結びつく。

（3）作品選定の基準

初期の選定基準は、主として戯曲の分析からなされ、舞台表現としてどういうものであるかを基準としている。その意味で同じ傾向の作品が並ぶ結果となった。そこで、新しい基準策定がなされた。

- I 感動的な演劇一生徒の情感に訴え、感情を振り動かすもの〈感動した〉
- II 思索的な演劇一生徒の理性に訴え、問題意識を喚起させるもの〈考えさせられた〉
- III 感性的な演劇一生徒の感性に訴え、魂を解放させるようなもの〈楽しかった〉

よりわかりやすい基準になったと言える。生徒の意識を解放させ、舞台と一体となって楽しむこと。演劇はこんなに楽しいものかと感じさせることは大切なことは大切なことである。また、とにかくドライに、上すべりになりがちな生徒の心に、深くしみじみとした情緒や感動を与えることも、今日特に必要であろうし、一方で考えることを回避したがる生徒に、問題を提起し考えさせることもむろん欠かせることはできない。

この提案はきわめて明確だ。企画小委員会は、この基準に照らし合わせ、同一群の作品を選出する。ただし、1年の限られた観劇（5月から8月）の間では、提案する8本の作品を集めることは不可能だ。基本的に企画委員が研究観劇し、推薦する形態になっているので、継続的に観劇し、候補作をあらかじめストックしておく必要がある。さらに、候補の中から作品を決定する際にも、運営委員会での説明、劇団を招いての説明会などの十分な論議を経て、最終決定に至る。このことは、理念に基づき作品選定がされる、安定した制度が作られた。そこには、常に「生徒」の目線が保証されている。これが、浜松高校演劇教室の歴史を刻む要因になっている。

3-8. 運営

各校運営委員が集まり、輪番制（浜松地域にある高校があらかじめ決めた輪番）で、会長校を務め、その校長が会長を務める。会長校の運営委員が運営委員長になり、その年の運営を取り仕切る実務の責任者になる。運営委員は各小委員会に属し、その任にあたる。小委員会の長と会長校、副会長校（会計を兼ねる）で常任委員会を組織し、常任委員会は運営委員会に諮る前の素案を決める。整然とした運営が、規約に定められている。

3-9. 記念行事

何周年記念の冊子の編集や記念の特別教室（本教室とは別に演劇を上演する）の企画、実施などを行うもので、本教室のみに終わらず、記念行事を行うことで総合的な取り組みを作り上げてきたと言える。特別教室として、劇団民芸「桜の園」、俳優座「かもめ」、

劇団民芸「セールスマンの死」、東京芸術座「蟹工船」と第11回から4年連続開催していることは特筆できる。本教室以外に、希望者のみではあるが、その当時評価された作品（必ずしも高校生向きではないが、高く芸術性が評価されている舞台）を特別教室として上演している。さらに、20周年記念公演とミュージカルの集い（フォーリーズ）、30周年にはシェクスピアター「間違いの喜劇」の公演、35周年はステップス「ラブ・サーティ」、40周年にはスエドミュージカル「ONLY ONE」と行われた。ミュージカルが多いのは、生徒のミュージカル志向が強い中で選ばれたと言える。

劇団民芸「桜の園」、俳優座「かもめ」、劇団民芸「セールスマンの死」、東京芸術座「蟹工船」

記念行事は、「過去」をまとめるために、資料集、感想文集、機関誌を合本の形で残し、歴史を確認できるようにしてきた。さらに「現在」の確認と「未来」へ向けて、シンポジウムを開催し、現状の検証と今後の方向性を探ることが行われた。

3-10. 2回の座談会・4回のシンポジウムの検証

シンポジウムは、開催された都度、意味づけが行われている。

①10周年記念事業として座談会「ヨーロッパの青少年演劇事情」。

土方与平氏⁴を交えて、座談会が行われた。世界の演劇事情を伺い刺激を受けたと思われる。併せて、演出家・八田元夫氏⁵と俳優・山本圭氏⁶の講演会も行われた。一線で活躍されている方々をお呼びすることができたことは、やはり演劇史上で「浜松高校演劇教室」が認知されていることを示すものだ。

②第24回に浜松高校演劇教室87シンポジウム開催。

③第25回に浜松高校演劇教室25周年記念「高校生の演劇観賞を考える」全国シンポジウム開催。

この2年連続で行われたシンポジウムは、過去の演劇教室の実情を振り返り、未来へ向けて踏み出す、大きな力になった。全国とのつながり、劇団とのつながりをさらに意識したものだ。私も25回に参加したが、「教室」の定義について熱い論議が交わされたことを記憶している。

④第29回に浜松高校演劇教室92シンポジウム開催。

⑤30周年記念事業「30周年座談会」。

⑥35周年浜松高校演劇教室シンポジウム開催

このシンポジウムは、「演劇教室に期待するもの」と題し、県下の高校演劇教室や劇団から多数集まり開催された。さらに、高校生の立場で浜松北高等学校の生徒が、意見発表を行った事が特筆できる。座談会への参加はあったが、生の意見発表がなされたことに、この演劇教室の成熟を感じる。その中に私の見解が載せられているのでここに引用する。

「ぶどうの会『夕鶴』から出発したことが、その後の作品決定に大きな方向性を作った。

完成度の高い作品を観劇することで、真の感動を創出してきた。

『教室』と位置づける事により、浜松方式の認定を得てきた。資料による事前指導、観劇、感想文や座談会による事後指導が確立された。このことにより一年を通じての活動が確立された。真剣な討論のもとに、演劇教室の『理念』が討議され、生徒の為に観劇させる事を主眼とした『理念』が決定されていった。

作品選定にかかわる『理念』の確立。三年サイクルで、様々な舞台を生徒に観劇させる事が可能になった。また、作品選定に直接生徒が参加できるシステムが考えられたこと。

今後の問題として、行政とのつながり、特に財政的な援助を引き出す取り組みを全体的にすること。行事の見直しに打ち勝つこと。絶えず『理念』について理解し、マンネリにならない運営に心がける事などがあげられる。また、生徒の参加ということは、今回のシンポジウムで前進しましたので、今後、さらに積極的な参加を期待したい。」

⑦浜松高校演劇教室40周年シンポジウム

延べ八十万人の地域の高校生が演劇教室で観劇した。このことで、地域の文化に貢献してきた。特別教室の企画をしたが、財政的な問題もあり、別の作品を上演することはできなかった。浜松演劇鑑賞会の協力で、例会作品三本への特別参加の機会を作っていただいたこと、そして、演劇教室作品である「ONLY ONE」を特別教室として、保護者、市民に観劇する機会を得た。このことは地方紙にも紹介され700名を超える方々に観ていただいた。

それらの事をもとにしながら40周年シンポジウムは開催された。「文化芸術振興基本法制定を受けて～今後の演劇教室の意義と課題～」と銘うち、関係者や劇団関係の方々との討議が行われた。基本法の制定は本来、演劇教室の後押しをしてくれるはずなのだが、実態は反対の方向に向かう力学も存在している。学校週五日制（授業時間の確保）、経営上の理由（私学）など衰退のスパイラルも存在している。教員は「生徒にとって、同じ二時間でも授業より得るものがある」。劇団員「生徒の反応は正直。役者を育ててくれる大事なお客さん」。これらから、それぞれの立場で、教室を守り育てていくことの大切さが確認された。

4. 創始後の展開

10年ごとの流れをまとめてみると次のようになり、舞台作品について記載する。そうそうたる作品が並んでいるが、特徴的なことも見られる。

4-1. 第1回～第9回 上演記録

第1回 ぶどうの会 夕鶴・赤い陣羽織 木下順二・作

資料集全員配布 感想文集各クラス2部配布 11校参加

第2回 劇団・民芸 夜明け前（第二部） 島崎藤村・原作 村山知義・脚本

	感想文集全員配布	劇団との座談会開始	1 2校参加
第3回	文化座	炎の人	三好十郎・作
	規約制定	運営の明確化	1 7校参加
第4回	劇団民芸	アンネの日記	アンネ・フランク・原作
	浜松市内の全高校が参加		2 3校参加
第5回	前進座	五重の塔	幸田露伴・原作 津上忠・脚色
	入場税免除	演劇教室の理念のまとめ	2 4校参加
第6回	劇団東演	どん底	ゴーリキー・作
	税対策委員会を予算小委員会に改称	作品紹介チラシ配布	2 5校参加
	来年度候補作品をリーフレットにして配布 (HR 単位)		
第7回	前進座	阿部一族	森鷗外・原作 津上忠・脚色
	レパトリー選定の基準提案	生徒の希望を宇品選定に入れる	2 5校参加
第8回	俳優座	ハムレット	W・シェイクスピア・作
	非課税開催		2 8校参加
第9回	劇団民芸	銀河鉄道の恋人たち	大橋喜一・作
	感想文速報版発行 (単年度)	旅費規程を定める	2 6校参加

この時代を代表する劇団 (歴史のある劇団) が占めている。劇団民芸、前進座、文化座、俳優座と並んでいて、この作品群をみても「名作」と評価されるものが並んでいる。高校生の観る作品としては申し分のない舞台であり、肌で一流のお芝居に触れていたことになる。運営委員の先生方も自信を持って携わっていたのではないだろうか。ただ、大人が「名作」と評価しても、高校生の中には初めて本格的な舞台鑑賞をする生徒もいるわけだから、当然大人の評価とは違う反応があっても致し方ない。「ハムレット」の舞台中、会場が騒々しいため中断したこともあったと聞いている。

劇団の人に何うと、「高校生という観客を前にして、どうしたら観てもらえるのか必死に考え、舞台を務めた」と言われる。役者は、時に困難な状況が生まれようと、自分の芸を磨いたようだ。

第5回開催時に「生徒座談会」に23人の生徒が参加し、「演劇教室に期待する」と題し行われている。これは、その後の発展に寄与している。その中で、観劇だけに終わらず、資料集があることで演劇に深く入ることができると指摘し、観劇後感想文を書いて劇中で経験したことを深くすべきだと述べている。資料が配付されるだけでは屑箱へそのままということもあり、教室で事前に活用される方が良いとか、感想文は全員書く方が良いなどの指摘もある。演劇について興味のない人もいるが、好きな生徒を増やしていく努力も大切だのどの意見もあり、率直な思いが交わされている。

4-2. 10回～第19回 上演記録

第10回	青年劇場	GOOD LUCKー青春の選択	ウイクトル・ロゾフ・作	
		10周年記念事業①記念誌②資料集感想文集の合本③講演会④座談会「ヨーロッパの青少年演劇事情」⑤西部高校演劇連盟「演劇講習会」		26校参加
第11回	文化座	越後警女 日記	斉藤真一・作	
		特別教室・劇団民芸「桜の園」	生徒感銘度調査	28校参加
第12回	東京演劇アンソナブル	夏の夜の夢	ウィリアム・シェクスピア・作	
		特別教室・俳優座「かもめ」最終候補作りリーフレット生徒全員参加		30校参加
第13回	前進座	さぶ	山本周五郎・原作	
		日曜・土曜観劇始まる 生徒座談会2回に		29校参加
		特別教室・劇団民芸「セールスマンの死」		
第14回	文化座	三人の花嫁	寺島アキ子・作	
		特別教室・東京芸術座「蟹工船」		28校参加
第15回	東京演劇アンソナブル	奇蹟の人	W・ギブツ・作	
		資料集で15周年特集		28校参加
第16回	青年劇場	夜の笑い	飯沢匡・作	
		諸内規の見直し 返金基準作成 特別教室企画したが取りやめ		28校参加
第17回	いずみたくフォリーズ	俺たちは天使じゃない	矢代静一・作	
		予算小委員会内規策定 新文化ホール建設の陳情書提出		27校参加
第18回	東京芸術座	翼は心につけて	関根庄一・作	
		市民会館の優先使用の適応を受ける		27校参加
第19回	劇団青年座	ある馬の物語	トルストイ・作	
		浜北文化会館使用開始 レポートリー選定で三票制の提案		27校参加

第10回の作品が大きな特徴を持っている。「もっともっと輝かせたい『学校での演劇鑑賞教室の灯』全国後援会代表幹事／浜松演劇鑑賞会代表幹事・林弘氏⁷の弁に、浜松高校演劇教室で、1973年の3年生は青年劇場の『GOOD LUCK！ー青春の選択』を観、56.7%が“3年間で最も感銘を受けた作品”と答えた。

彼らが求めたのは、『ハムレット』（俳優座）でも、2年次『銀河鉄道の恋人たち』（劇団民藝）でもなく、青年の生と、より直接に向き合う作品の方だったのである。

追跡調査では、直近の3年次の作品支持が一般の傾向であるが、1985年の3年生は3年次の『柳橋物語』（前進座）に37.9%、40.8%の生徒は1年の時観た青年劇場の『青春の砦』が“最もよかった”のである。

青少年劇場運動は1970年代に本格的活動期に入り、青年劇場は現在までその先頭で在り続けている。1972年に「全国的交流の場に」と発刊した「学校演劇通信」を、75年に「青少年劇場通信」と改題、中・高校生の「演劇創造と鑑賞の充実発展」に寄与し

ようとする姿勢を鮮明にした。学校現場によって、青少年劇場運動の意義が深くとらえなおされながら——。」

やはりこの中で林氏が述べられている「青年の生と、より直接に向き合う作品」のとらえ方が的を射ている。このことは、今までの名作路線とは一線を画す舞台が求められていると言える。今後の舞台選定に大きな影響を与えたと考えられる。

また、特別教室として、劇団民芸「桜の園」が上演され1764名の生徒が自主参加した。反響は的確で、主演の滝沢修氏が「最高の観客であった」と言われたと記録にある。十年の歴史が育んだ、生徒の成長と言えるだろう。

4-3. 第20回～第29回 上演記録

第20回	青年劇場	青春の砦	大谷直人・作	
		20周年記念事業①資料集感想文集の合本		28校参加
		②20周年記念公演とミュージカルの集い（フォーリーズ）		
第21回	東演	歌え！悲しみの深き淵より	作	
		特別委員会にて「常任委員会」の設置	理念の検討・改訂	27校参加
		基準の検討・改定を審議・提案		
第22回	前進座	柳橋物語	山本周五郎・原作	
		常任委員会発足（予算委員会解消）		27校参加
第23回	音楽座	ヴェローナ物語	横山由和・作	
		機関誌「演劇教室通信」	生徒座談会3回	26校参加
第24回	青芸	虹	嶋津与志・作	
		浜松高校演劇教室87シンポジウム開催		26校参加
第25回	東京芸術座	十二人の怒れる男たち	ビナルト・ローズ・作	
		浜松高校演劇教室25周年記念「高校生の演劇観賞を考える」	全国シンポジウム	
		開催		26校参加
第26回	関西芸術座	もう一つの教室	廣澤榮作・作	
		1年前に作品を選ぶ方式開始		26校参加
第27回	新人会	ガラスの家族	パターソン・作	
		日曜観劇の廃止		27校参加
第28回	青年座	サーカス物語	ミハエルエンゲ・作	
		生徒座談会特例として4回		27校参加
第29回	青年劇場	すみれさんが行く	斉藤紀美子・作	
		浜松高校演劇教室92シンポジウム開催	運営委員の手引き作成	
		30周年記念事業運営委員会発足		26校参加

第10回から、第29回までの劇団をみると、老舗の劇団に代わり新しい劇団名が見られる。作品選定が多様になってきていることの表れでもあり、高校生の気持ちに寄り添うようなテーマ設定がされた作品が増えてきている。また、ミュージカル作品が初めて上演されたことも特筆される。浜松高校演劇教室は、ミュージカルを何年に一度はという選定は行っていない。ストレートプレイとミュージカル（音楽劇も含めて）を同一の基準で選定してきた。しかし、音楽性を併せ持つミュージカルはインパクトが強く、要望が増すことにもなる。故に、これ以降ミュージカル作品が増えることにもなった。

4-4. 第30回～第39回 上演記録

- 第30回 いずみたくフォリーズ 俺たちは天使じゃない 矢代静一・作
30周年記念事業「30周年座談会」 26校参加
組織体制の一部改訂（監査の改組、機関誌小委員会発足）
- 第31回 劇団新人会 帰去来 岡本耕大・作
30周年記念事業①記念誌②合本 26校参加
③特別教室シェクスピアシアター「間違いの喜劇」の公演と「30年の歩み」展示
- 第32回 シェクスピアシアター 夏の世の夢 ウィリアム・シェクスピア・作
会費改定（1300円から1600円に） 26校参加
- 第33回 劇団銅鑼 セボ・スキハラ 平石耕一・作
西部養護学校観劇 25校参加
- 第34回 東京芸術座 十二人の怒れる男たち レジナルド・ローズ・作
35周年記念事業運営委員会発足 25校参加
- 第35回 青年劇場 翼をください ジェームス三木・作
35周年記念事業①特別教室・ステップス「ラブ・パーティー」 24校参加
②浜松高校演劇教室シンポジウム開催
- 第36回 ホラシアターこんにゃく座 魔法の笛 こんにゃく座・作
会費改定の検討・決定（1600円から1800円に） 24校参加
退会規約設定
- 第37回 演劇集団「円」 光る時 渡辺えり子・作
夜の部一般観劇会開催 欠席者返金内定 21校参加
- 第38回 イッツフォーリーズ ミラクル 辻仁成原作 高橋亜子・作
夜の部一般観劇会開催 19校参加
- 第39回 関西芸術座 遙かなる甲子園 西岡誠一・脚色
40周年記念事業運営委員会発足

四半世紀が過ぎ、演劇教室も曲がり角を迎えたと言える。時代の変化が押し寄せてきている。大きくまとめると、①定時制の統廃合②私立学校の独自性③授業時間の確保という

観点での行事精選だ。その中で、上演作品一つ一つはインパクトのある舞台が並んでいるが、重層的でわかりにくいと後に評価された作品もあった。この中で第35回「翼をください」は、高校生の思いが吐露されていく作品であった。また、第38回ミュージカル「ミラクル」は、子供と親の確執の中で、子供が成長していく瞬間を描いた作品で、生徒や教員の評価は高かった。この10年に音楽劇（オペラ）も含め3本のミュージカルが上演された。「翼をください」も主題歌は教科書にもある有名な歌が使われている。高校生にとって、音楽性の高い演劇は受け入れやすいものであり、アンケートなどでも望む声も多かった。

4-5. 第40回～第49回 上演記録

第40回	スエミュージカル ONLY ONE	高橋由美子・台本	
	40周年記念事業①記念誌②合本		15校参加
	⑤浜松高校演劇教室40周年シンポジウム		
	④特別教室スエミュージカル「ONLY ONE」		
第41回	劇団離風霊船 ゴジラ	・ 大橋泰彦・作	15校参加
第42回	シアター青芸 THE WIND OF GOD	今井雅之・作	15校参加
第43回	青年劇場・3150万秒と、少し	ラルフ・ラウン・原作	15校参加
第44回	イツォルズ 俺たちは天使じゃない	矢代静一・作	15校参加
第45回	劇団銅鑼 Big brather	小関直人・作	15校参加
第46回	劇団文化座 天国までの100マイル	浅田次郎・原作	14校参加
第47回	青年劇場 修学旅行	畑澤聖悟・作	14校参加
第48回	ステップ エンターテイメント boy be・・・	横山由和・作	14校参加
第49回	東京演劇アンソナル ラリー 僕が言わずにいたこと	タージーン・作	14校参加

この並びは新鮮でもある。全く新しい劇団（創造集団）の舞台もあり、フレッシュな舞台が上演された。スエミュージカル、劇団離風霊船、ステップ エンターテイメントは初登場である。上演したことのある劇団も新作を上演している。青年劇場、劇団銅鑼、劇団文化座、東京演劇アンソナルは、高校生の思いに近い作品で迫ってきた。スエミュージカルは、音楽、照明すべてにおいてコンピューター制御のシステムを使い、迫力ある舞台を見せてくれた。また、40周年の記念行事として、特別公演を実施し、保護者や市民に向けた舞台を行ってくれた。

その後、浜松市の文化功労者として表彰されることになる。

5. 青少年演劇運動

青少年の育成を旗印にして中学校や高等学校で上演する演劇で、劇場や体育館で上演される。演じるのは主に「創造団体」と呼ばれる劇団であり、その演技法は人間による芝居（人間劇）、スクリーンを使った影絵芝居（影絵劇）、人形を使った芝居（人形劇）に大

別される。戦後まもなく「子ども達にお芝居を」の掛け声と共に高度成長期の日本において始まった文化的活動である。その運動は全国的に広まり、学校行事に「演劇鑑賞会」という一つのカテゴリを持つまでに至った。その一つが「浜松高校演劇教室」である。

2002年2月の国語審議会の答申において初めて「教育現場に演劇を」というフレーズが盛り込まれ、教育界・児童演劇界にとって新しい風が吹いてきている。その反面、教育現場は多忙化し、授業、校務に追われ、鑑賞教室の運営ということに労力をなかなか時間をかけられない現実が存在している。そのために、教員側の都合でやめる学校も増えてきた。ここ数年の鑑賞教室の減少は顕著であり、学校公演を主体に取り組んできた劇団にとって危機的状況になっていると言われている。

「青少年演劇運動」という活動に最も積極的だった劇団が青年劇場であり、劇団レパートリーの柱に、必ず青少年対象の作品を据え、劇団員、制作者が普及活動に当たっている。全国で自主的な鑑賞組織を地方の人たちとタッグを組んで、運動として広げる活動に取り組んでいる。浜松高校演劇教室もまた、この劇団とは意見交流をしたりしながら進めてきた。また、現に「浜松敬陽高校」がこの教室に参加するきっかけは、青年劇場団の作品を体育館で鑑賞し続け、そして劇団からの演劇教室への強い参加要請を受けたものであった。

6. 浜松方式

静岡新聞2003年3月4日付けに「『生の感動伝えて40年』一合同鑑賞方式の先駆け」の見出しに続き、「良い会場で、より良質な芝居を高校生に見せたいとの思いから、日本で初めて、地域の高校の連携による合同鑑賞方式を確立した『浜松高校演劇教室』が今年、創立40周年を迎える。テレビ隆盛の時代に生の舞台芸術を県西部へ招致し続け、「浜松方式」と呼ばれる合同観劇の理念を全国へも波及させた。」とある。

このことが全てであり、「理念」の確立が歴史に大きな役割を果たした。

「浜松方式」という言い方は、運営に理念を据え、その理念に従って様々な工夫を凝らし、その中心に常に「生徒」がいたことがこの歴史を刻むことにつながったと私は考える。

7. 最後に

全国的な演劇鑑賞として、長野県、山形県、石川県などがある。その中で、長野県は、長野市民劇場が先にでき、その支援で学校における芸術鑑賞が始まっている。このことは、浜松も同様である。ただ、長野は全県下にひろがり、長野県そのものを巻き込み、補助金も獲得し、教育の中に認知させたことは大きい。残念ながら、浜松は全県下には広がらなかった。しかし、浜松は、その運営方法に、先に述べたように「浜松方式」と呼ばれる、民主的な生徒が開わる運営を確立し、50年の歴史を歩んできた。

今、時代の移り変わりの中で、退潮（参加校減少）していることは否めない。教育の中

に果たしてきた役割を再度確認し、主役は生徒であることを考えて欲しい。教員の仕事が多忙になっていることは事実であるが、失って欲しくないものの一つが、この演劇教室だと私は思う。「理念」を柱として運営し、生徒の主体を育てて来た50年の歴史の灯火を何時までも点し続けることが、今求められている。

資料

- ・浜松高校演劇教室資料集 10周年記念
- ・浜松高校演劇教室資料集 20周年記念
- ・浜松高校演劇教室資料集 30周年記念
- ・浜松高校演劇教室資料集 40周年記念
- ・演劇教室40年
- ・長野県高等学校 芸術鑑賞のあゆみ

追記

続編、第2部「生徒はどう観てきたか」を予定している。

注)

-
- ¹ 平成23年4月より校名変更 平成25年度創立80年を迎える私立高校
 - ² 浜松演劇観賞協議会は演劇教室より1年早く浜松に設立された鑑賞会のこと
 - ³ 浜松女子商業高等学校校長 劇作家
 - ⁴ ひじかた・よへい=秋田雨雀・土方与志記念青年劇場顧問、演劇制作者
 - ⁵ はった もとお、日本の演出家
 - ⁶ やまもと けい、日本の俳優。元俳優座
 - ⁷ 浜松演劇教室立ち上げの委員で、その後退職まで運営委員として、基盤整備に尽力された。その後、演観協の代表幹事の任にもあった。現青年劇場後援会代表幹事でもある。